



# 京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要 2022

## 〈論文〉

「病」から誕生したアステカの太陽神  
—陰と陽を併せ持つ天使たち—

..... 嘉 幡 茂 1

異端審問と領主権をめぐるテスココ先住民貴族層の紛争

..... 小 林 致 広 23

A obra “Inocência” e a introdução da literatura brasileira na Era Meiji do Japão

..... 久保平 亮 45

感覚実践がマヤ系先住民の織物文化の連続性に与える影響

..... 大 倉 由布子 67

## 〈研究ノート〉

Rethinking Colonial Frontiers: Survivance and Residence on The Itza Maya

..... 白 鳥 祐 子 93

明治・大正期における草創期のラテンアメリカ文献

—横山源之助、永田稔、藤田敏郎のラテンアメリカ移民論—

..... 辻 豊 治 113

メキシコ近代建築の位相

—ルイス・バラガンの感情的建築思想と、  
機能主義および地域主義との比較を通じて—

..... 東 俊一郎 127

## 〈書評〉

アルトゥーロ・エスコバル著、北野収訳・解題

『開発との遭遇—第三世界の発明と解体』（新評論）

..... 中 沢 知 史 145

〈研究ノート〉

## 明治・大正期における草創期のラテンアメリカ文献

——横山源之助、永田稔、藤田敏郎のラテンアメリカ移民論——

辻 豊 治\*

### キーワード

戦前日本、ラテンアメリカ研究、横山源之助、永田稔、藤田敏郎

### Resumen

Este estudio investiga la localización y presenta los contenidos de publicaciones en Japón de estudios latinoamericanos de antes de la guerra mundial. En el presente artículo se presentan las obras de tres autores: Gennosuke Yokoyama, Shigeshi Nagata y Toshiro Fujita, realizadas en los inicios de los estudios sobre Latinoamérica, en los periodos Meiji y Taisho, y que contribuyeron al posterior desarrollo de los estudios latinoamericanos. Gennosuke Yokoyama, fue un periodista conocido como pensador social. Abordó la problemática de la pobreza y el desempleo en Japón con la investigación de las realidades de las clases pobres en la ciudad y el campo, y participó en la constitución del primer sindicato de Japón. No obstante, se distanció del movimiento sindical debido a la represión del gobierno y a los conflictos internos, y buscó la solución a las dificultades en los emigrantes a Sudamérica. Shigeshi Nagata, como presidente de Nippon Rikkokai, una entidad protestante para jóvenes, promovió y contribuyó al desarrollo de proyectos para la emigración japonesa a Sudamérica, por ejemplo, con la fundación de la colonia “Aliança” en Brasil. Toshiro Fujita, como diplomático participó en la fundación de la Colonia Enomoto en México, y también se dedicó a mejorar las circunstancias adversas en las que se encontraban los emigrantes japoneses en las tierras de labranza de Brasil. Los tres eran defensores de la “creación de pueblos” en las colonias japonesas, basados en la cooperación organizada, como son cooperativas y asociaciones industriales, la austeridad y la cooperación espiritual a través del apoyo mutuo.

### はじめに

本研究は戦前日本におけるラテンアメリカ研究について、文献の所在を調査し、その内容を紹介することにより、戦前のラテンアメリカ像がどのようなものであったかを明らかにすることをめざしている。前稿では戦前におけるラテンアメリカ研究の中心となった野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎の3人のラテンアメリカ全文献を紹介した<sup>1)</sup>。それぞれ外交官、法学者、実業家である。

\* 京都外国語大学名誉教授

本稿では明治・大正期のラテンアメリカ研究の草創期において野田良治とともにその後のラテンアメリカ研究と移民研究を基礎づける3人の先駆者、ジャーナリストで社会運動家の横山源之助、移民事業家の永田稔、外交官の藤田敏郎の著作を取り上げる<sup>2)</sup>。このように戦前におけるラテンアメリカ研究の発展の中核はさまざまな職種の人々に担われていた。横山源之助は日本の貧困・失業問題の解決を南米移民に求め、永田稔は自ら主宰する日本力行會と信濃海外協會に依拠して移植民事業を推進し、藤田敏郎は榎本殖民政策を受け継ぎ、外交官の立場から海外移植民政策を現地で実践した。3人の文献を紹介することにより、それぞれの移民論の背景となる思想とラテンアメリカにおける実践を明らかにしたい。

## 1 横山源之助の著作

### 1.1 横山源之助における「日本の貧困」

横山源之助 [1871 (富山県魚津町) - 1915] は富山中學中退、英吉利法律學校 (現中央大学) 在籍後、「横濱毎日新聞」の記者となる。社会思想家、社会運動家として知られている。横山は貧民層についてのフィールドワークに従事し、問題の処方箋としての社会改革の途を社会主義思想に求め、1897年には日本最初の労働組合である労働組合期成會の設立に高野房太郎<sup>3)</sup>、片山潜<sup>4)</sup>などとともに参加した<sup>5)</sup>。その後も都市における貧民層や職工、労働者、農村における小作人を「下層社会」と呼んでその実態調査を進め、数多くの調査報告を公にし、代表作として1899年に『日本之下層社會』<sup>6)</sup>を出版した。しかし労働運動は弾圧と内紛によって停滞し、横山はエリート知識人への反発から片山潜などの主流派と袂を分かった。1918年地元富山で起こった米騒動で表面化した農村の貧困と都市への波及に対して運動が機能しないことへの失望感から、貧困からの解放を海外への移植民に活路を求めると至った。横山の著作のなかで、社会運動の思想や実践が移民論においてどのように生かされているかに留意しながら、3冊のラテンアメリカ関連文献を紹介していく。

### 1.2 横山源之助『海外活動之日本人』(1906年 明治39年)

本書は日露戦争以降、海外で活動し、実績を挙げている人物を取材したものである。本稿では南米とメキシコに限定する。冒頭、1902年に日本を出発して「世界徒歩旅行」の途に就いた中村直吉<sup>7)</sup>を紹介している。南米は今や世界の焦点であり、これでパナマ運河が開通すれば、欧米諸国はこの地域を植民地 [入植地] として狙うだろう。この南米にはペルーを除き日本人移民は1人も入っていない。1896年頃豪州移民事業に従事していた佐久間貞一<sup>8)</sup>は、当時南米を視察してブラジル植民を提唱していた田中貞吉<sup>9)</sup>に賛同してブラジル移民に着手したが、ブラジルの経済恐慌により挫折した。田中は南米に再航し、ペルーにおいて移民契約を結び、1899年の森岡商會による第1回ペルー移民を実現させた。田中は秘露開發會社を設立し、移民事業、金融業、貿易業に乗り出すが急逝した。河村八十武<sup>10)</sup>は在米期間が長く、1898年帰途にあった田中に桑港で出会った。その後1903年、第2回ペルー移民のとき田中の右腕としてペルーに渡り、移民たちが同盟罷業を起こしたときは鎮撫に当たった。またリマで日本商品の雑貨店を開いた。河村は「南米太郎」田中の衣鉢を継ぐ「南米次郎」として最近ではインカ護謨會社との間で労務契約を結んだ。

メキシコへの発展を考えると、榎本武揚<sup>11)</sup>を忘れるわけにはいかない。榎本は外相として殖

民政政策を進め、メキシコ政府と契約して殖民事業を実行した<sup>12)</sup>。この事業は結局、失敗した。1891年に吉川泰次郎<sup>13)</sup>と佐久間が移民業の草分けとなる日本吉佐移民を設立し、小林直太郎<sup>14)</sup>もこれに参加した。吉川の死後、佐久間はブラジル移民を計画して東洋移民を興した。小林はその社員となりブラジル行きが予定されたが、その出航直前、急遽移民中止が決まった。失意にあった小林に榎本がメキシコ殖民の後始末を要請した。小林はメキシコ政界に働きかけ殖民地の維持を図り、エスクイントゥラ地方に15家族の小林殖民地を築いた。また榎本殖民の生き残りである照井亮次郎<sup>15)</sup>は1902年にエスクイントゥラに戻り、殖民事業を再開した。その第一歩が日墨殖民信用組合の設立である。組合員は財産を持たず、土地・財産は組合の共同所有とされた。「此の組合は当時我國一部の書生間に持て囃されてゐる社會主義的組合に依つて成立され・・・或意味に於ける共産主義を行つたのである」(138-139頁)。今日では組合員11名、240町歩余りの規模こそ小さいが現地に新日本を建設しようとする率先者である。エスクイントゥラでは、以上の小林殖民地、日墨殖民信用組合の他に藤野農場と小橋岸本商會が活動している。

### 1.3 横山源之助『南米渡航案内』(1908年明治41年)

米国が日本人労働者の自由渡航を禁止したことにより、渡航希望者の目は南米に向けられることになったが、この地域に関する著書は少なく、そこで本書の刊行を思い立った<sup>16)</sup>。日本人移民に適する国としてペルー、チリ、アルゼンチン、ブラジルを挙げている。ブラジルは広大な面積、ペルーは最初の通商条約の締結、チリは新進の気象に富み、アルゼンチンは商工国として有利な事業が可能との理由による。これらの国々について地勢、気候、産業などの一般情報、生活費や労賃など生活する上での情報、在留日本人の状況、各国の移民政策、日本商品の普及状況、貿易上の注意などが記述されている。契約移民に限らず、商工業に従事することも考えての渡航案内となっている。

在秘邦人は約3500名であり、ほとんど海岸の甘蔗および綿花耕地で働いているが、明治植民が森林地方の護謨林に[100名規模の]契約移民を送った。ペルーにおける有望な事業として野菜耕作、牛豚牧養、食料品販売、理髪業などの分野を挙げている。今のところチリへの移民の途は開かれていないし、自由渡航も認められていない。在亜邦人は18名ほどが首都に集まっている。アルゼンチン農業は機械が主であるため、農業移民の余地はない。また東洋人移民への扱いはあまり期待できない。

本書の出版時点で第1回ブラジル移民が実行されており、「神戸埠頭を發せし我移民八百名は、カマラダ[日雇い]にあらずしてコロノ[普通耕夫]なりしとは余が我移民の爲に深く喜ぶ者なり」(139頁)と記している。皇國殖民の水野龍<sup>17)</sup>はサンパウロ州だけでなく、リオデジャネイロ州との間に植民地設定計画を進めている。ブラジルにおける今後の發展地としては両州以外には先ずパラナ州が挙げられ、ミナスジェライス州、次いでバイーア州、エスピリトサント州であろう。リオグランデスル州とサンタカタリナ州は最好適地であるが、すでにドイツの勢力範囲となっている(169頁)。

### 1.4 横山源之助『南米ブラジル案内』<sup>18)</sup>(1913年大正2年)

1912年著者は第3回ブラジル移民に同航<sup>19)</sup>して渡伯し、ブラジルの植民事情を調査した<sup>20)</sup>。3月3日に神戸港を出航し、12月5日神戸港に帰着した。ブラジルには145日間滞在した。本書は

その成果であり、前作の『南米渡航案内』の「ブラジル篇」をさらに詳述したもので、「序言」は大隈重信が書いている<sup>21)</sup>。

明治末期には食料価格の高騰、賃金の低迷、税負担増により、民衆の困窮化は深刻さを増していた。この「生活難を海外に補わんとするのは蓋し自然の趨勢である」(10頁)。当時、もっとも有望なのがブラジルであった。産業が発展し賃金が高いこと、移民を積極的に受け入れていること、気候条件が良好で、日本より健康地であること、人種の偏見がないこと、さらに土地所有の容易さ、移植民への配慮が挙げられる(1, 12頁)。本書はブラジルの一般事情とともに、農業とくに珈琲耕地での労働条件や生活実態など日本人移民が今後生活していく上で不可欠の情報を与えている。

移民はサンパウロ州の各珈琲耕地に入っていくが、耕地には村落はなく、私人の領地が広がっている。最近では毎年数千名の日本人が渡航し、在伯邦人は1万人を超えている。今後、数万数十万人と増やしていく必要がある。こうして南欧移民と日本人移民が同居することになるが、前者は貯金に、後者は送金に熱心である。「送金に熱心なのは、故郷の父母弟妹を忘れない爲めで、貯金に熱心なるのは、異日獨立の地を作らんが爲めであろう」(99頁)。

ブラジルでは移民誘致とともに植民地の造営にも力を入れている。植民地には政府・州政府設定のもの他、会社経営、個人経営のものがある。日本人植民地についてはサンパウロ州政府から払い下げを受けた五万町歩のイグアペ植民地〔桂、セッチ・バラス、ジュキア、レジストロから成る〕が伯刺西爾拓殖によって経営され、来年には300家族を受け入れる予定である。米作を主とし、黒豆、玉蜀黍を副作物とする。また直営農場をもつ。この会社の創立者には澁澤榮一、後援者には桂太郎、取締役には青柳郁太郎<sup>22)</sup>が名を連ねている。こうして「我が日本人がブラジルの南部に、日本の新天地を形成する」(178頁)ことになった。政府経営のものではサンパウロ州ソロカバナ沿線のモンソン植民地が設定されており、30数家族の日本人が入植している。日本人の間では頼母子講が機能しているが、横山はこの風習に代えて近代的な生産組合、消費組合あるいは購買組合を興すことを提案している。これこそドイツ移民発展の基となっているとも指摘し、社会改良主義者としての片鱗を窺わせる。

本書は綿密な取材に基づいたブラジル移民研究の先駆である。「社会・労働問題の解決という畢生の願いを一途にブラジル殖民にかけ、そこに最後の労働運動の幻影をおいもとめたのだ」(立花1979:246)。

## 2 永田稔の著作

永田稔 [ながたしげし、1881(長野県諏訪郡豊平村) - 1973]、東京専門學校(現早稲田大学)中退。1914年プロテスタント系青年教育団体で移民事業に取組む日本力行會の会長となる。戦前『南米一巡』、『兩米再巡』、『兩米三巡』を著している。いずれも紀行記であるとともに、移住案内であり、移民関係人物論でもあるが、永田の移民事業への思いが込められている。戦後『兩米四巡』(1952年)が出版されている。

### 2.1 永田稔『南米一巡』(1921年大正10年)

永田稔は1920年最初の南北アメリカ視察のため、3月5日横浜港を出帆した。北米滞在后、



6月1日にリオ港に着いた。

ブラジルではリオ市に4日間、サンパウロ市に5日間滞在し、両市において**山縣勇三郎**<sup>23)</sup>、**堀口大守**<sup>24)</sup>、**隈部三郎**<sup>25)</sup>、**黒石清作**<sup>26)</sup>、**三浦鑿**<sup>27)</sup>、**野田良治**<sup>28)</sup>など日本人社会の代表的な人物と次々に会見している。その後、リベイラン・プレートを訪れ、日本人が監督をする珈琲園を視察し、さらにサンパウロ州北境のミナスジェライス州グランデ河畔に入植している600家族の日本人米作者を訪ねた。彼らは日伯産業組合を組織し、共同購買、共同精米などを実践している。こうした統一組織の気運はサンパウロ州にも及んできている。さらにノロエステ線ビリグイの日本人植民地に向かった。このビリグイ植民地はサンパウロ土地木材植民會社が所有する14万町歩の珈琲農園で甘蔗・米作も兼作している。今年〔1920年〕には日本人400家族、イタリア人600家族、スペイン人350家族、その他200家族、合計1550家族が入植している。日本人移住地では1918年には小学校や青年會を設けている。ビリグイ市街地から16キロの所に21家族の山根植民地があり、その奥に福岡県出身のカトリック教徒27家族が入植している。その後マツグロソドスル州に入り、アキダウアナから南行して、**鈴木貞次郎**<sup>29)</sup>や**上塚周平**<sup>30)</sup>などが共同経営するエトロ・レゲル植民地に着いた。さらにサンパウロ州プロミッソンの上塚植民地にも足を伸ばした。

7月3日サントスからジュキアまで鉄道に乗り、そこで蒸気船に乗り換え、5日レジストロに到着した。ここはサンパウロ州政府から無償で払い下げを受けて日本人植民地が設定された所である。入植者は長野出身の132戸、沖縄の6,70戸、珈琲耕地からの再移住70戸、その他日本からの直接入植者から成っている。レジストロでは旧知の**輪湖俊午郎**<sup>31)</sup>に会っている。「同郷の同志、海外發展の理想家〔永田〕と其實行者〔輪湖〕とが一室に會して話すのは如何にも愉快なことである」(158頁)。ブラジルには300家族1千余人の長野県人がおり、信濃村を形成している。

60日間のブラジル滞在のまとめとして、ブラジル移民の在り方について次のような提言を行っている。

- ① 對伯基本政策の策定<sup>32)</sup> ② 科學的伯國研究團の組織 ③ 移住者救導會の組織  
④ 海外開拓銀行の設立 ⑤ 自由渡航者の奨励 ⑥ 独身女性の渡航 ⑦ 移民保護法の改正<sup>33)</sup> ⑧ 教育、宗教を普及させる文化運動機關の整備 ⑨ 移住者顧問官制の制定 ⑩ 在留民権利の保護 ⑪ ジュキア、バウル、マナウスにおける領事館の新設

7月24日サントス港を出航して、7月28日モンテビデオに到着した。さらに船でラプラタ河を遡航してブエノスアイレスに到る。小規模のニューヨークといったところだ。永田はサンパウロでアルゼンチンの査証を得るのに1週間を要し、現地の繁文縟礼の官僚主義の苦渋を味わった(161-165頁)。在亜邦人は2~3千である。ブエノスでは1週間余り滞在し、公使館、移民収容所、日本力行會員初め移民關係者を訪問している。8月11日ブエノスを発ち、翌日サンティアゴに入った。在チリ邦人は約300名で首都には50名がいる。ここでは**田付公使**<sup>34)</sup>から「アマゾン上流地帯=南米の中心部」への入植の重要性について説明を受けた(265頁)。8月27日カヤオ港からペルーに入った。リマでは領事館、中央日本人會、アンデス時報社などを訪ねた。リマ在住の日本人は2500-3000名、中央日本人會とは別に日本人協會があり『アンデス時報』を発行している。また500名を有する沖縄を初め各県で縣人會があり、業種別に同業組合が生まれている。ペルーでは農業移民が定着せず、契約期間を全うする者は十分の一に満たず、都市に転出するか、他国に転航する。

9月10日パナマからキューバに向かい国内を周遊して、ベラクルスに上陸した。そこから鉄

道でメキシコ市に向かう。メキシコ市で大使館、グアダルーペ寺院、大聖堂などを訪れ、10月22日米国側の国境の町エルパソに入った。こうして6月1日から10月22日までの144日間の中南米旅行を終えた。本書は旅程の確定できない個所が散見されたが、紀行記の形をとったラテンアメリカ概説書である。また現地事情、歴史・地理案内、人物論でもある。

## 2.2 『兩米再巡』（1925年 大正14年）

著者は信濃海外協會の移住地を購入する任務を帯びて再び渡伯することになった。本書はその紀行記であり、報告書である。1924年5月下旬に横浜を出港し、翌年2月1日に帰国している。ブラジルまでの経路はハワイ、サンフランシスコ、ロサンジェルス、ソルトレークシティ、デンバー、シカゴ、ワシントン、ニューヨークと周り、8月9日にリオに到着した。米国では52日間に日本人社会と連絡を取り、日本力行會員との交流、排日運動の背景を探り、ソルトレークシティではモルモン教徒の植民地を訪問した。排日に抵抗できなかった原因として市民権を得ようとしなかった点を挙げている。

ブラジルでは8月13日にサンパウロ入りし、駅頭で伊藤牧師<sup>35)</sup>に迎えられ、その足で輪湖俊午郎宅を訪ねた。8月25日移住予定地視察に出発した。まずサンパウロ市から鉄道で領事館や邦字新聞社があるバウルに着いた。しかしそこでノロエステ線に乗り換える予定であったが当時、内乱の影響により車で10時間かけてルッサンビラ駅に着いた。購入予定地は駅の東南方向33キロにある。8月31日から交渉に入り、7千500町歩、日本円で約20万円、支払いは3年賦とすることで契約は成立した。

当初、50家族の植民者・小作人を募集して入植させることとした。その資金は製材、精米、製糖、珈琲精選、輸送機関、倉庫などの経済的事業と学校、病院、教会などの文化的事業に使用され、その利益は移住者に還元される。移住地には青年會、婦人會、研究會を組織し、移住者間の繋がりと生活向上を図り、「新しい村」（『ありあんさ』移住地入植規定」29頁）を創出する。キリスト教の協同精神を生かす村づくりである。20万円計画の出資者には千円当たり10町歩を提供する。協會で小作人を手当てすることができる。

9月19日、1913年創設されたレジストロ植民地を再訪し、28日サンパウロに帰還した。その後の行程は、12月10日リオ港発、1月15日サンフランシスコから日本に向けて出航、2月1日横浜港に帰着である。帰国後は移住者募集、資金募集運動、報告会と旅行の事後処理に追われることになった。「いでや余生を此基礎建設に捧げん哉」（298頁）と結んでいる。

## 2.3 『兩米三巡』（1932年 昭和7年）

1932年著者にとり3回目の南北アメリカの旅に出た。今回の目的は外務省の委託による在伯邦人の子弟教育の調査および拓務省から委託された在留邦人に関する調査、そして著者自ら創設に関わったアリアンサ移住地への訪問である。

旅程は6月5日神戸港発、7月5日サンパウロ着、同市では總領事館、海興事務所、ブラジル拓殖組合を訪問し、7月8日ノロエステ線アラサトゥーバに到着した。ここはサンパウロ州の奥の都であり、さらにその「奥は日本人の集團移住地で、・・西北に行けば日本人の獨り舞臺の土地」（92頁）である。ここでは反対派の画策によりブラジルを追放されていた日伯新聞社主の三浦鑿に再会している。永田は三浦に同情的であった。さらに4時間半でルッサンビラ駅に着いた。こ

の駅からアリアンサ移住地一巡の10日間の旅が始まった。力行會農場、熊本移住地、第二アリアンサ移住地を経て、40キロ地点にある第一アリアンサの中心部に到った。信濃海外協會直営農場、力行會館、ホテル、珈琲精選所、精米所、精糖所、医務局、小學校、運動場、住宅地域を備え、生みの親である長野県知事本間利雄にちなんだ「トシヲポリス」と呼ばれた。所有する珈琲園は8区域からなり、合計7千500町歩である。移住地内は各種の組合や組織が錯綜し混乱が生じていることに対し、その調整に奔走することになり、10月中はサンパウロ州内を行き来した。

海外移住組合聯合會統制下に5つの移住地があり、そのうちのひとつソコカバナ線バストス移住地を10月26日に訪れている。3万町歩400戸の規模である。聯合會が直接統制し、移住地内には組合組織は未成立である。その後、近接のレトニア（ラトビア）<sup>36)</sup> 人移住地を訪問した。彼らは欧州大戦による荒廢からブラジルに逃れ、10年間で土地代を全額償還し、生活の安定を得た。私有地とは別に公有地（共存村）での共同生産を行い、禁酒禁煙の禁欲的なキリスト教精神に基づいて村づくりを行っている。さらに11月2日にカンピーナスの東山（とうざん）農場<sup>37)</sup>を訪ねた。この農場は「十分なる資金と優秀なる頭と、世界的に聯絡ある三菱の諸機關との聯絡」（218-219頁）により先駆的な経営で知られている。11月8日サンパウロ市を發ち、リオ港から11月18日ベレンに寄港し、当地の南米拓殖社長の福原八郎<sup>38)</sup>にベレンを案内され、アマゾン開発の現状について説明を受けた。12月24日ロサンジェルスから日本への帰途に就いた。

## 2.4 『兩米四巡』（1952年昭和27年）

戦後、著者は4回目の北米・中南米旅行を試みた<sup>39)</sup>。1951年6月末に日本を發ち、米国、ブラジル、アルゼンチン、キューバ、メキシコを周って翌年5月31日に帰国した。7月30日リオに入り、翌年5月15日にテキサスに着いたので、中南米には289日滞在したことになる。

今次の戦争について「祖国日本の国民たちは、朝鮮や満洲、台湾や樺太をとりそこなったり、ひりつぴんやいんどねしやにちよつかいを出したり、真理の上から・・非難のできるようなことをしでかした」（18頁）、一方、「あめりかを正義人道の国として、・・許すことのできなかつた一事は、その人種的偏見で、それは日本人に対してもつとも明らかに表われた」（18頁）。「あめりかが世界に対し、正義人道を叫ぶ前に、先ずあめりかをして排日運動をやめさせねばならぬ・・かくて私は日米主戦論者の一人であった」（19頁）。在米日本人が基本的な人権回復のために50年間戦ったことが「どれ程、米国を尊くし、その価値を増加するかしれない」（21頁）としている。

リオでは20年ぶりに輪湖俊午郎に迎えられた。サンパウロ州では3つの日本人移住地を訪ねている。レジストロ、バストス、アリアンサである。ブラジルのように資本家が育たず、政府に頼れず、交通や市場が不備の国では産業組合が必要である。アリアンサ移住地では産業組合の形態を当初から維持してきたが、サンパウロ近郊のコチア産業組合が25年の歴史をもっている。他にもジュケレイ産業組合があり、組合相互の連絡機関もあって活発に活動しており、産業組合は「ぶらじる在留日本人のもつとも輝かしい業績の一つ」（129頁）である。

現在のところブラジルへの呼寄せはうまくいっていない。その要因の一つに勝ち組、負け組の抗争がある。この抗争について著者はさまざまな講演会で、祖国は新しい愛国心で再出発した。諸君も新しい愛国心をもってもらいたい、と訴えた（175頁）。

3月27日サンパウロからブエノスアイレスに向かった。当地では3つの日系新聞社、日本人会を訪問し、日本力行會会員、信濃海外協會会員と旧交を温めた。ペロンの保護主義に言及し、エバ・



ペロンの訃報を伝えている。4月11日サンパウロに戻った。そして16日サンパウロからリマ、グアヤキル、パナマ、ハバナを経て、メキシコ市に到った。メキシコでも国家主義が台頭しており、石油初め地下資源を国有化してしまった。改革が定着するかどうかは、メキシコだけの問題ではなく、いかに中産階級を育てるかにかかっている（267頁）。5月14日メキシコを立ち、ワシントンに向かう。半月の米国滞在の後、5月31日羽田空港に到着した。今回の旅行は戦後の移住はどうあるべきかを検証するためのもので、それを担う人物像を次のように想定している（296-298頁）。

- ① 大学相当の教養 ② 肉体労働に耐える心身 ③ 一技能 ④ 子供への教育付与
- ⑤ キリスト教の信仰 ⑥ 4Hクラブ<sup>40)</sup>の知識 ⑦ 移民史の知識 ⑧ 海外事情の知識
- ⑨ 外国語の修得 ⑩ 海外マナーの修得 ⑪ 旅費の所持 ⑫ 親族や隣人が居住する移住先の存在

### 3 藤田敏郎の著作

藤田敏郎 [1862 (岡山県津山町) - 1937] は 1891 年にラテンアメリカ最初の領事館がメキシコに開設されたときの領事代理であり、ブラジル総領事を歴任した。外交官の立場から最初はメキシコ、後にはブラジルへの移民の推進、擁護に当たった。

#### 3.1 『南米の殖民地』<sup>41)</sup> (1924年 大正13年)

本書のタイトルは『南米の・・・』とあるが、実際はブラジル、とくに聖州に多くの紙数を費やしている。本書は、1923年の帰国以来行った30回余りの講演原稿を基にまとめられたものである。第1章では南米諸国と欧米諸国との関係を概観し、第2章でブラジルに焦点を当て、産業（農業、鉱工業）、外国貿易、対日貿易について詳細に分析している。第3章聖州概況、第4章聖州移殖民事情として珈琲耕地での農業者の種類別の考察、日本人の発展状況、ドイツ人殖民地の発展状況、聖州の移民政策、耕地労働から殖民地設置への経路、日本の移殖民政策、最後に付録として「ブラジル渡航案内」が掲載されている。

11～12年前の聖州における日本人移民は珈琲耕地に雇われ、賃金と間作〔珈琲樹間に作物を植え、その収益は供与される〕の利益を貯蓄するに過ぎず、珈琲耕地主が未開地を分割・売却しないかぎり、いつまでも独立農となれなかった。当初、著者は耕地移民が2、3年の契約を完了後、殖民地に移行する経路を考えていたが、耕主が作業に慣れた移民を手放さないため、著者は伯政府や聖州政府に改善を求めたが、うまくいかなかった。その後、聖市を起点とする鉄道建設が進み、沿線の大小地主は土地を分割、売却することとなった。日本人やイタリア人が「年賦にて低廉なる土地を購入し、或いは借地して、開拓をなし」（132頁）、著者の念願はある程度、実現した。

1922年末には在伯邦人は3万7千余りに達し、土地は7万7千町歩、珈琲樹700余万本を有していた。ドイツ移民に関しては「官民合同し、相當の金を募集して、移殖民に多大の具體的便宜を與へたり」（139頁）。こうしてサンタカタリナ州、リオグランデドスル州でドイツ殖民地が隆盛した。ドイツ人はサンタカタリナ州人口の8割を占め、その他諸州に150万人が散在している。一方、「共同一致の念に乏しき」（140頁）日本人移民は「學校、宗教、衛生、娛樂、金融、購賣買組合、共済組合等の機關もなく」（140頁）、地主や高利貸、仲買人等の乗ずるところとなっている。そこで著者は耕地移民から独立農への過程で「最初より申告せて、統一せる組合を設け、

一緒に土地を購入して殖民せば」(141頁)として集団的な殖民地建設を提唱している<sup>42)</sup>。さらに殖民地設置に当って倉庫の設置、医学留學生の派遣、病院の設立、小学校への補助金、相談所の設置、共済組合の設立、キリスト教伝道師の派遣、葡語新聞の発行、船賃・商品運賃の軽減の必要性を説いた。とくに倉庫会社を中心にして生産品の加工販売機関を設置することは、地方に散在している日本人移民にとり高利貸や仲買人の搾取を逃れ、少量加工や少量輸送の不利益に対する解決策となる。そして日本人がブラジルに定着する鍵として、市民権の獲得を挙げている。聖州以外にリオグランデス州(米作と牧畜)、パラナ州(米・甘蔗・珈琲)が日本人にとっては有望な地域である。

### 3.2 『海外在勤四半世紀の回顧』<sup>43)</sup>(1931年 昭和6年)

本書は1885年外務書記生としてハワイに赴任して以来、1923年にブラジルを最後に26年余りの海外勤務(本省勤務13年余り)を終えた著者の回想録である。安藤太郎<sup>44)</sup>が序文を寄せている。著者はハワイ、サンフランシスコ(桑港)、メキシコ、シンガポール、スラバヤ、シカゴ、ムンバイ、ブラジルと在勤した。本稿ではラテンアメリカに関する記述に限定して紹介したい。

ハワイ在勤中、桑港から伝道に来ていた美山貫一<sup>45)</sup>の影響を受けて、「禁酒禁煙基督教に入りし」(8頁)と述懐している。1928年1月付『日伯新聞』に「在伯同胞に禁酒を勸む」(232-242頁)という記事を寄稿している。1888年から桑港に在勤となったが、折から日墨通商条約が結ばれ、さらにメキシコ市に領事館が開設されると著者は領事代理として赴任した。そして著者を含む6名で北部エルモシージョを起点として太平洋岸をサリナクルス港まで南下し、テワンテペク地峡を経てオアハカを通り、メキシコ市に戻るという175日をかけての視察を行った。首都帰着後、各地での歓迎に対しディアス大統領を表敬訪問した。[こうして1897年の榎本殖民が実現した]。1894年メキシコを離れ、シンガポール領事を経て99年シカゴに在勤となった。米国での経験から「米國人は黒人とか、支那人、以太利人に對しては殆んど人類を以て待遇せざるや」(114頁)との印象を語っている。

1911年から13年まで一等書記官として移民問題特別調査の命を受けて、リオ公使館に赴任し、早速サンパウロ各地を巡回した。賃金のピンハネ、粗末な家屋、耕地売店による専売などの耕主の横暴を、著者は『第一伯國サンパウロ州巡回報告書』として1911年4月16日付で小村壽太郎外相に訴えた。その後、住宅の改良、町村の店舗近くに耕地を選ぶなど契約時には公使館が立ち会うこととなった。13年、後事を野田良治に託し、帰朝した。20年再びサンパウロ總領事として赴任した。7年間の不在の間に、聖州や鉄道会社は英国資本を導入して鉄道延長工事が進められ、欧州大戦による穀物価格の高騰が加わって平野殖民地を嚆矢としてプロミッソン、ビリグイなど邦人による殖民地建設が進展した。前回離任したときの無所有地、無資産の「被雇移民時代」(230頁)と比べると隔世の感がある。著者によると、ブラジルにおける日本人移民の適地は、ミナスジェライス州、聖州高地、両州以西及び以南諸州、熱帯地方でも高地に限る。アマゾン流域などの純熱帯低湿地方はいかに無償であっても、在任中アマゾン移住地の話には乗らなかった。「古きアマゾン問題が近頃芽を吹き出すは・・怪訝に不堪所となす」(232頁)と断じた<sup>46)</sup>。

## むすびに代えて

本稿では、いずれも明治・大正期において中南米、とくにメキシコ、ブラジルへの移住民に海外発展の新しい可能性を求めて現地事情を丹念に調査、分析した3人の文献を紹介した。文献はいずれも移民研究に分類されるが、中南米概論、中南米産業論としても先駆的な研究となっている。横山源之助が実証を重んじるジャーナリスト、社会主義者として、永田稠は日本力行會会長の立場から殖民事業に従事するプロテスタントとして、藤田敏郎は榎本人脈のプロテスタント外交官としてそれぞれの職業・専門をつうじて「地上の樂園」(藤田)<sup>47)</sup>に「新社会を形作る一種の殖民事業」(横山)<sup>48)</sup>により「新しい村を建設していく」(永田)<sup>49)</sup>という理想を中南米メキシコ、ブラジルにおいて実現しようとした。社会主義やプロテスタンティズムの立場から組織面では個人の私有財産を排して、協同性(協同組合、産業組合、消費組合)に基づく共同体[日本村]建設をめざし、生活面ではプロテスタンティズムの原理にしたがって飲酒の弊害を説き、禁欲や蓄積こそ移民にとって必要な要素であると説いた(藤田)。永田にもその原理は共有されていた。その先駆的実践的モデルとしてドイツ移民による南部3州における村づくりが注目された。

今後の日本人移住民の発展について、横山と藤田はサンパウロ州とリオデジャネイロ州を核として北はバイア州から南はパラナ州まで大西洋岸に沿った発展を示唆したのに対し、永田においては「ブラジル國一國集中主義を排す」(『兩米三巡』:249)として、太平洋岸からはアンデスを越えて、大西洋岸においてはアマゾン河流域とラプラタ河中流域から南米大陸の中心に向かう発展を構想した。排日運動に関して、横山文献では執筆時、問題はまだ顕在化していない。永田、藤田文献においては苦慮しながらも帰化、市民権の獲得、言語・教育・キリスト教の受容など同化による対応を主張した。

今後の研究課題として横山源之助についてはその社会主義思想における協同組合の位置づけ、永田稠において戦前の中南米殖民事業と満蒙開拓を戦後どのように総括したのか、藤田敏郎においては榎本殖民の挫折がブラジル殖民にどのように生かされたのかなど、研究の種は尽きない。

## 注

- 1) 「戦前日本におけるラテンアメリカ研究の見取図 一野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎の業績、およびその他の研究の担い手一」、『京都外国語大学ラテンアメリカ研究所紀要』、21号、2021年12月1日、89-103頁。  
[https://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kiyou21\\_04.pdf](https://www.kufs.ac.jp/ielak/pdf/kiyou21_04.pdf)
- 2) 生年では藤田敏郎、横山源之助、永田稠の順であるが、本稿の構成は文献の発行年順としている。野田良治は1912～43年までにラテンアメリカに関連して8点、総頁数3169頁を出版しており、いずれも最多である。
- 3) 高野房太郎 [1869(長崎市)-1904]、労働組合運動の先駆者。
- 4) 片山潜 [1859(岡山県羽出木村)-1933]、労働組合運動、共産主義運動の指導者。
- 5) 「高野房太郎を労働運動生みの親、片山潜を育ての親というなら、横山源之助は運動以前からの種子蒔く人、耕作者であった」(立花1979:151)。
- 6) 『日本の下層社会』、岩波書店、2010年、(初版は『日本之下層社會』、教文館、1899年)。

- 7) 中村直吉 [1865 (愛知県豊橋市) -1932]、明治期の冒険家、60 ヶ国を周遊。『アマゾン探検記』(啓成社、1915 年)の著作がある。
- 8) 佐久間貞一 [1846 (江戸) -1898]、明治期の実業家、1897 年労働組合期成會評議員となる。「日本のロバート・オーエン」と呼ばれた。横山源之助は横濱毎日新聞記者として 1896 年に初めて佐久間に会っている。横山の貧民・労働問題としての移民思想は、佐久間の影響である(立花雄一「解説」『横山源之助全集(第7巻)』:505)。
- 9) 田中貞吉 [1857 (山口県周防) -1905]、移民事業者、東洋汽船による南米航路の開設に尽力した。田中は、横山源之助が富山中學 1 期生として入学し失踪事件を起こしたときの中学校長であった(405 頁 立花 1979:242)。本書では 76 ~ 93 頁に亘って田中に言及している。
- 10) 河村八十武 [1865・66 (山口県萩) -]、没年は調査中。
- 11) 榎本武揚 [1836 (武蔵国江戸下谷御徒町) -1908]、外相のときメキシコ殖民を唱え、中南米初の領事館をメキシコに開設した。外相辞任後も殖民協會を立ち上げ、1897 年メキシコに殖民團を派遣した。
- 12) 当時、東海悦郎なる人物がいた。南米およびメキシコを視察したとして南米殖民を唱え榎本に影響を与えたが、一度も海外経験はなく、まったくの詐欺師であった(400 頁)。
- 13) 吉川泰次郎 [1852 (奈良県) -1895]、明治期の実業家、日本郵船社長。
- 14) 生没年、生誕地は調査中。
- 15) 照井亮次郎 [1874 (岩手県花巻) -1930]、メキシコの日本人殖民地指導者。川路賢一郎『シエラマドレの熱風一日・墨の虹を架けた照井亮次郎の生涯一』(パスコジャパン、2003 年)参照。
- 16) 本書の執筆に関して、ペルーについては河村八十武、進藤道太郎、ブラジルについては水野龍、鈴木貞次郎、アルゼンチンについては伊藤幸次郎、秦正雄からの文献や聞き取りから情報の多くを負っている、と冒頭の例言で述べている。
- 17) 水野龍 [みずのりょう、1859 (高知県高岡郡) -1951]、自由民権運動に関わる。1903 年皇國殖民を設立し、1908 年第 1 回移民 781 名をブラジルに送った。1917 年海外興業を設立して移民事業を一本化した。
- 18) 本書出版の前年に野田良治が最初の著書『世界之大寶庫南米』(博文館、1912 年)を出している。「公使館一等通譯官野田良治氏は、篤學の士である。昨年『南米』の著あり」と紹介している。同書でのブラジルへの言及は 28 頁、南米における日本人移民については 22 頁である。
- 19) 根川論文「一九一〇年代前半ブラジル行き移民船の航海」において移民船研究の対象として横山の乗船記を取り上げている。
- 20) 「海外渡航の経験なしに『海外渡航案内』を著したことに對して我慢ならず、条件が整えば自身が海外へ渡航することを期していた」(根川 2017:63)。
- 21) 大隈重信は横山源之助の後援者であり、ブラジル行きも大隈が援助している。横山は二葉亭四迷との交友から影響を受けて、文学と社会問題への関心を持った。また樋口一葉の晩年に書簡のやり取りをしている。
- 22) 青柳郁太郎 [1867 (千葉県大多喜) -1943]、ブラジルへの移植民の必要性を政府に働きかけ、東京シンジケート代表としてサンパウロ州政府からリベイラ河畔イグアベを入植地として払い下げを受け、日本人植民地を創設した。医療法人「同仁会」初代理事長。
- 23) 山縣勇三郎 [1860 (長崎県平戸) -1924]、北海道有数の事業家、1908 年ブラジルに渡り、農場、商店、塩田など幅広く事業を営む。
- 24) 堀口大學 [1892 (東京市) -1981]、詩人、フランス文学者。堀口九萬一駐ブラジル公使の長男。
- 25) 隈部三郎 [1865 (熊本市) -1926]、第 1 回移民以前の 1906 年に家族移民としてブラジルに渡った移民の先駆者。



- 26) 黒石清作 [1870 (新潟県) - 1961]、邦字新聞『伯刺西爾時報』 社主。
- 27) 三浦鑿 [みうらさく、1882 (高知県土佐郡) - 1945]、『日伯新聞』 社主。日本の軍国化を批判した。前山隆『風狂の記者—ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯—』(御茶の水書房、2002年) 参照。
- 28) 野田良治 [1875 (京都府河鹿郡佐賀村) - 1968]、メキシコ、ペルー、チリ、ブラジルにて外交官として邦人の擁護に当り、またラテンアメリカ研究の第一人者でもある。この当時は總領事代理の立場にあった。永田は野田について「南米に在留すること廿餘年、日本第一の南米通で、・・極めて研究家」(33頁) と評している。
- 29) 鈴木貞次郎 [1879 (山形県北村山郡) - 1970]、ブラジル移民の先駆者。俳句は正岡子規に師事。社会主義者として『平民新聞』に関与。日本人移民の試験移民となる。案内役・通訳として第1回移民をサントス港に迎える。『聖州新報』の編集に携わる。
- 30) 上塚周平 [うえつかしゅうへい、1876 (熊本県下益城郡) - 1935]、第1回移民に同航して渡伯。鈴木貞次郎と協力して、サンパウロ州にプロミッソン植民地を開く。プロミッソンに「上塚公園」が、サンパウロ市内に「上塚橋」がある。
- 31) 輪湖俊午郎 [わこしゅんごろう、1890 (長野県南安曇郡) - 1965]、ジャーナリスト、『日伯新聞』創刊、『伯刺西爾時報』編集長、一時帰国し永田稠とともに信濃海外協會設立。アリアンサ移住地建設に尽力した。
- 32) 「對歐洲の外交が追隨で、對米外交が退嬰で、對亜細亞大陸の外交が武斷で、對南洋對南米外交は無策である」(176頁)。
- 33) 政府は移民保護を移民会社任せにしているが、移民会社は保護どころか虐待している(183-184頁)。
- 34) 田付七太 [たつけしちた、1867 (山口県萩) - 1931]、1917-20年にチリ公使、1923年初代ブラジル大使。アマゾン植民を推進した。
- 35) 伊藤ジョン八十二 [1888 (長野県上伊那郡) - 1969]、聖公會牧師。日本力行會会員。1919年渡米、1923年渡伯。1926年ブラジル聖公會牧師となる。
- 36) 「力行会員の青年の間では、[ラトビア人の] パルマはあこがれの農場であり、『パルマ参り』という言葉まであった」木村快『アリアンサ移住地とパルマ農場』。<http://www.gendaiza.org/aliansa/lib/palma.html> 2022.8.15 閲覧
- 37) 1927年に土地3千700ヘクタールを岩崎弥太郎の長男久弥が購入し、東山農場が創設された。「東山(とうざん)」は三菱創始者岩崎彌太郎の雅名である。岩崎家固有の事業として、日本国内、アジア各地、ブラジルで農林畜産事業が展開されたが現在、岩手県の小岩井農場とこの東山農場だけが残っている。
- 38) 福原八郎 [1874 (福岡県三池郡) - 1943]、鐘紡取締役、アマゾン調査團団長として渡伯。パラ州アカラー河畔に日本人移住地を設定した。その管理会社として南米拓殖が創立され、社長に就任した。
- 39) 本書の冒頭部分(57-63頁)で内村鑑三の『地人論』(警醒社書店、1901年、第4版)から、中南米は共和国とは名ばかりで、圧制政治が甚だしく強固な政治が欠乏しているが、日本にとりこの地域は今後とも重要である、という言葉を用いている。一方、内村による米國を盟主として両米共和国を創設するのが、米國国民のピューリタンとしての天職である、という意見には批判的である。
- 40) 米國発祥の農村青少年を対象とした生活改善運動。日本でも1951年に導入され、1973年に現名称「全国農業青年クラブ連絡協議会」となり、2020年時点で全国に約850クラブ、約1万3千人が所属している。
- 41) (辻2020:146) 参照。



- 42) 本書執筆とはほぼ同時期、信濃海外協會によるアリアンサ移住地が創設され、他県の海外協會による移住地建設が始まっている。
- 43) 本書は昭和6年の出版であるが、中南米については明治24年から大正12年までの回顧であるので、本稿の対象時期に含めた。
- 44) 安藤太郎 [1846 (江戸四谷) - 1924]、旧幕臣で箱館戦争に参加する。1871年外務省通訳官として岩倉使節團に同行、ハワイ総領事、外務省通商局長、日本吉佐移民顧問、日本國民禁酒同盟初代会長。ハワイ總事のときに受洗している。安藤太郎 (永田基編) 『安藤太郎文集』 (日本國民禁酒同盟、1929年) [<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1881391>] には美山貫一と藤田敏郎が序文を寄せている。榎本殖民事業には、安藤太郎が支援した藤田敏郎、殖民地調査のためチャパス州を含めてメキシコに派遣された根本正代議士など日本の禁酒運動と深い関係がある (井沢 1972:87-89)。
- 45) 美山貫一 [1847 (山口県萩) - 1936]、メソジスト派牧師。1875年渡米し、サンフランシスコで洗礼を受ける。排日の原因の一つが日本人の酒癖の悪さにあるとして禁酒を説く。ホノルルにメソジスト教会を創設。帰国後、1896年安藤太郎や根本正らとともに日本國民禁酒同盟を設立し、「禁酒・禁煙」を訴えた。
- 46) 昭和期に入りアマゾン入植計画が本格化していく。アマゾン入植を巡る議論については「アマゾン論」として改めて取り上げたい。
- 47) 『南米の殖民地』、138頁。
- 48) 『海外活動之日本人』、434頁。
- 49) 『兩米再巡』 「南米 ブラジルありあんさ移住地の建設」、29頁。

### 横山源之助の著作

- 1906年 『海外活動之日本人』、松華堂 (245頁)。  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/800865> 2020.6.25 閲覧  
(『横山源之助全集 (第7巻)』、立花雄一編、法政大学出版局、2005年、所収)。
- 1908年 『南米渡航案内』、成功雜誌社 (211頁)。  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/767393> 2019.7.28 閲覧  
(『横山源之助全集 (第8巻)』、立花雄一編、法政大学出版局、2005年、所収)。  
(『日系移民資料集 南米編 (第2巻)』、日本図書センター、1998年、復刻)。
- 1913年 『南米ブラジル案内』、南半球社 (228頁)。  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950675> 2019.7.30 閲覧

### 永田稔の著作

- 1921年 『南米一巡』、日本力行會 (423頁)。  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/965666> 2019.6.18 閲覧  
(『日系移民資料集 南米編 (第4巻)』、日本図書センター、1998年、復刻)。
- 1925年 『兩米再巡』、日本力行會 (420頁)。  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1021162> 2019.6.18 閲覧
- 1932年 『兩米三巡』、日本力行會 (400頁)。

1952年 『両米四巡』、日本力行会（317頁）。

### 藤田敏郎の著作

1924年 『南米の殖民地』、アルパ社（198頁）。

1931年 『海外在勤四半世紀の回顧』、教文館（304頁）。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1268579> 2022.4.20 閲覧

（『日系移民資料集 南米編（第17巻）』、日本図書センター、1999年、復刻）。

### 参考文献

井沢実

1972 『ラテン・アメリカの日本人』、日本国際問題研究所。

外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会

1992 『日本外交史辞典』、山川出版社。

立花雄一

1979 『評伝横山源之助』、創樹社。

辻豊治

2020 「戦前日本におけるラテンアメリカ研究（Ⅱ）—大正末期～戦前昭和期における移民研究の進展—」、『紀要』（京都外国語大学ラテンアメリカ研究所）、20号、143-166頁。

根川幸男

2017 「一九一〇年代前半ブラジル行き移民船の航海—横山源之助報告による巖島丸航海を中心に—」、『海事史研究』（日本海事史学会）、No.74、52-77頁。

パウリスタ新聞社編

1996 『日本・ブラジル交流人名事典』、五月書房。

明治期外交資料研究会編

1995 『外務省年鑑（第1巻～第5巻）』、クレス出版。





# BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos  
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos  
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

## 2022

### < ARTÍCULOS >

- Dios “feo” de los aztecas: divinidad que oscila entre la oscuridad y la luz  
..... Shigeru KABATA 1
- La inquisición y la disputa por el señorío entre los nobles texcocanos en los  
años 1530-1540  
..... Munehiro KOBAYASHI 23
- A obra “Inocência” e a introdução da literatura brasileira na Era Meiji do Japão  
..... Ryo KUBOHIRA 45
- Continuidad de la cultura textil de los mayas y trabajo somático  
..... Yuko OKURA 67

### < ESTUDIOS PRELIMINARES >

- Rethinking Colonial Frontiers: Survivance and Residence on The Itza Maya  
..... Yuko SHIRATORI 93
- Publicaciones pioneras sobre Latinoamérica en los períodos Meiji y Taisho:  
publicaciones sobre la emigración latinoamericana por Gennosuke Yokoyama,  
Shigeshi Nagata y Toshiro Fujita  
..... Toyoharu TSUJI 113
- Phases of Mexican Modern Architecture: Through a Comparison of Luis  
Barragán’s Emotional Architectural Philosophy with Functionalism and  
Regionalism  
..... Shunichiro HIGASHI 127

### < RESEÑA DE LIBROS >

- Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World,*  
por Arturo Escobar (Shu Kitano tr.)  
..... Tomofumi NAKAZAWA 145

Vol.  
**22**